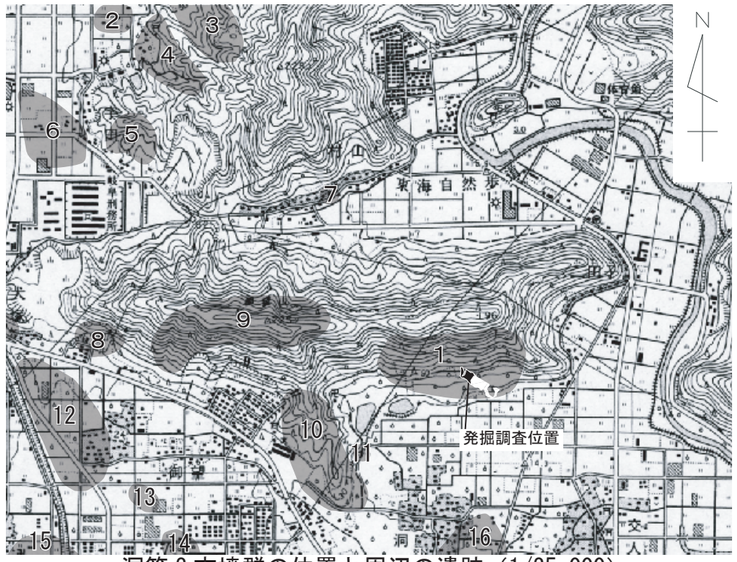
遺跡の位置と地形

洞第２古墳群は、岐阜市北西部の御望山南斜面に立地します。この傾斜面は山腹からの崩落土が積み重なって形成されており、現況は柿畑です。濃尾平野の縁辺にあたる山地の斜面には６世紀から７世紀にかけての多数の古墳群が立地しており、当古墳群もこうした群集墳の一つと考えられます。洞第２古墳群は、これまでの調査で９基の古墳があったとされていましたが、年月を経て一部を除き正確な位置がわからなくなっていました。

平成 27 年度の発掘調査で新たに７基の古墳や石室を確認しましたが、今年度の発掘調査で、さらに２基の古墳を確認しました。



洞第 2 古墳群の位置と周辺の遺跡（1/25,000）

（国土地理院 1:25,000 地形図「北方」（平成 14 年）3 月 1 日発行を元に作成）

1　洞第２古墳群（古墳 / 古墳）
2　則松遺跡（散布地 / 古代）
3　則松第 1 古墳群（古墳 / 古墳）
4　則松第２古墳群（古墳 / 古墳）
5　宇田古墳群（古墳 / 古墳）
6　宇田遺跡（散布地 / 古墳～古代）
7　村山遺跡（散布地 / 縄文）
8　犬塚古墳群（古墳 / 古墳）
9　御望古墳群（古墳 / 古墳）
10　洞第 1 古墳群（古墳 / 古墳）
11　洞山上遺跡（散布地 / 縄文）
12　御望 A 遺跡（散布地 / 縄文～近世）
13　御望 B 遺跡（散布地 / 中世）
14　御望 C 遺跡（散布地 / 中世）
15　中西郷・中遺跡（散布地・古代～中世）
16　黒野洞遺跡（散布地・古代～中世）

帝塚山大学教授　宇野隆夫氏のコメント

２か年の調査によって、昨年度確認された７基の古墳や石室に加えて、新たに２基の古墳を発見し、過去の周知の古墳と合わせて洞第２古墳群の様子が明らかになりつつある。

当古墳群は、はじめに緩やかな場所に古墳が築造され、その後、斜面上方の急な場所にむかって古墳が築かれていったと考えられる。終末期には古墳の周囲の閑地に小規模な石室を築いている。このように古墳築造の過程を明らかにできたことは非常に重要である。古墳が衰退していく過程が、中央と大きな時間差がないことから、洞第２古墳群の被葬者は中央と繋がりを持った人物で、中央の影響を受けた可能性があり、のちの壬申の乱において活躍した美濃地方の豪族の一員であった可能性も考えられる。

用語説明

【埋葬施設】古墳の死者を葬るための施設で、墳頂部に設置される「竪穴式石室」や墳丘斜面に入り口がある「横穴式石室」の他、竪坑を掘って木製の棺を直接置く木棺直葬と呼ばれる形態などがある。

【須恵器】日本では古墳時代から平安時代にかけて生産された陶質の土器である。朝鮮半島から伝えられた技術（窖窯（あながま））を用いて、野焼きよりも高温で焼き上げるようになり、より硬質な焼き物が生産されるようになった。

【壬申の乱】西暦 672 年に、天智（てんじ）天皇の太子である大友皇子（おおとものみこ）と、弟である大海人皇子（おおあまのみこ）（のちの天武（てんむ）天皇）が争い起こった内乱である。大海人皇子側は、いち早く不破関（ふわのせき）（関ヶ原町）をおさえ、東国の豪族を味方につけたことが勝利の一因とされており、乱で活躍した功臣の中に、各務郡（各務原市）に本拠をもつ村国氏出身の「村国男依（むらくにのおより）」や武芸郡（関市・美濃市）に本拠を持つ身毛氏出身の「身毛広（むげつのひろ）」の名が見られる。

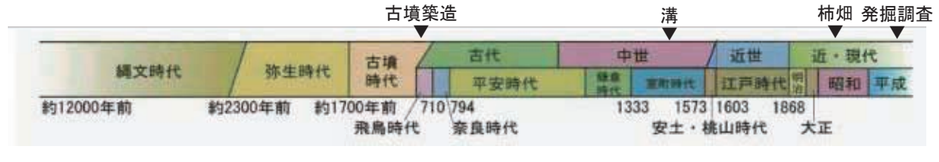
洞第2古墳群 現地見学会

平成２８年９月２４日（土）
現地見学会：１３：３０～
主催：岐阜県文化財保護センター

洞第２古墳群発掘調査 DATA

所 在 地：岐阜県岐阜市洞
調査面積：2,187 ㎡
事 業 主：国土交通省中部地方整備局
　　岐阜国道事務所
調査原因：東海環状自動車道建設
調査期間：平成 28 年５月～ 11 月

洞第 2 古墳群の変遷



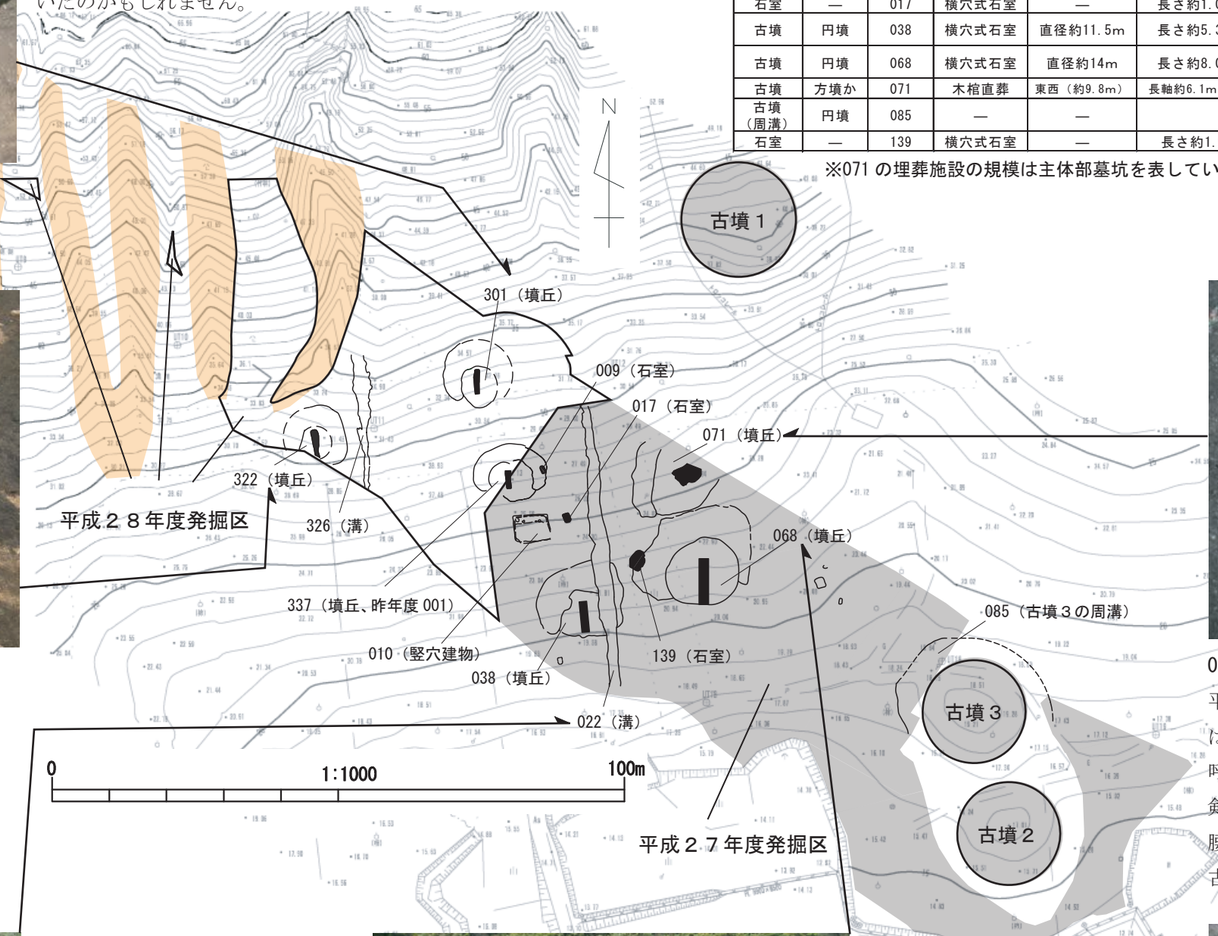
洞第２古墳群遺構配置略図（数字は遺跡の調査番号）

301　石室の須恵器（平瓶）出土状況

301 の石室では、一番奥の壁の前に平瓶（へいへい）と呼ばれる須恵器が置かれていました。昨年度は 038 の古墳でも同じような場所で平瓶を確認しています。置く土器の種類や場所が決められていたのかもしれません。

322　古墳の検出状況

発掘作業では、土を削りながら昔の人々の生活の痕（遺構）を探します。この作業を遺構検出といいます。写真は古墳（322）を検出した時のものです。このあと石室を埋めた土砂を取り除きます。まだ作業途中ですが、どのように石室が埋まっていたかご覧になってください。



平成 28 年度発掘調査で確認した古墳一覧

遺構種別	墳丘の形	調査番号	埋葬施設	墳丘の大きさ	埋葬施設の大きさ	出土遺物	時期	備考
古墳	円墳	301	横穴式石室	直径約7.9m	長さ約4.3m×幅約0.9m	須恵器坏身・坏蓋・平瓶	古墳時代後期	周溝あり
古墳	円墳	322	横穴式石室	直径約(5.7m)	長さ約(4.3m)×幅約0.8m	なし	古墳時代後期	周溝あり
古墳	円墳	337	横穴式石室	直径約9m	昨年度001の埋葬施設	昨年度001の出土遺物	古墳時代後期	平成27年度001未調査部分

平成 27 年度発掘調査で確認した古墳一覧

遺構種別	墳丘の形	調査番号	埋葬施設	墳丘の大きさ	埋葬施設の大きさ	出土遺物	時期	備考
古墳	円墳	001	横穴式石室	直径約9m	長さ約2.3m×幅約0.6m	須恵器坏蓋	古墳時代後期	周溝あり
石室	—	009	竪穴式石室	—	長さ約1.0m×幅約0.3m	なし	古墳時代後期	墳丘・周溝なし
石室	—	017	横穴式石室	—	長さ約1.0m×幅約0.6m	なし	古墳時代後期	墳丘・周溝なし
古墳	円墳	038	横穴式石室	直径約11.5m	長さ約5.3m×幅約1.3m	鉄刀・鉄鏃・耳環・土師器・須恵器	古墳時代後期	周溝あり
古墳	円墳	068	横穴式石室	直径約14m	長さ約8.0m×幅約1.7m	鉄刀・鉄鏃・土師器・須恵器など	古墳時代後期	周溝あり
古墳	方墳か	071	木棺直葬	東西（約9.8m）	長軸約6.1m×短軸（約4.2m）	鉄剣・鹿角装小刀・提砥など	古墳時代中期	周溝あり
古墳（周溝）	円墳	085	—	—	—	なし	不明	古墳３の周溝
石室	—	139	横穴式石室	—	長さ約1.9m×幅約0.5m	なし	古墳時代後期	墳丘・周溝なし

※071 の埋葬施設の規模は主体部墓坑を表しています。また、カッコ付きの数値は残存部の値を表しています。

071　木棺直葬の古墳から出土した遺物

平成 27 年度の調査で確認した古墳のうち、071 は埋葬主体部が横穴式石室ではなく、木棺直葬と呼ばれる形態でした。木棺痕跡のすぐ側からは鉄剣のほか、写真の鹿角装の小刀や提砥（さげと：腰にぶら下げる砥石）などが出土しました。他の古墳より古い時期に造られたと考えています。

022　中世以前の大溝

平成 27 年度の発掘調査で確認しました。発掘区の北端から南端まで 50mの長さがあり、さらに外にのびていました。傾斜に対してほぼ垂直に、直線的にのびています。今年度の発掘区にもその延長を確認できました。また今年度見つかった 326（溝）も類似する遺構の可能性があります。

068　全長８mの石室を持つ古墳

左右の写真は平成 27 年度の発掘調査で確認した古墳（068）（左写真）と、一番奥の壁付近の遺物出土状況（右写真）です。床には大小さまざまな礫(れき)が敷き詰められ、鉄刀や鉄のやじり、須恵器や土師器が見つかりました。遺物の出土状況から埋葬は複数回行われたと考えています。